

各関係機関長 様

佐賀県農業技術防除センター所長

アザミウマ類、コナジラミ類の施設栽培終了後の 野外への飛び出し防止対策の徹底について

施設栽培のキュウリ、トマト等で発生したアザミウマ類やコナジラミ類は、栽培終了後に施設から飛び出すと、野外で増殖します。その後、次作において施設に再び侵入し、秋期の発生の原因となります。また、これら害虫はウイルス病を媒介するため、その伝染環を断ち切るためには、**栽培終了時に媒介虫を施設内で死滅させることが重要です。**

については、下記を参考に対策を徹底するよう生産者への指導をお願いします。

記

1. これまでの発生状況

5月17~22日に実施した定期調査の結果は、以下のとおりであった。

- 1) キュウリにおけるコナジラミ類の発生株率は47.0%（平年4.5%）であり、平年より多かった。アザミウマ類の発生株率は7.0%（平年15.8%）であり、平年よりやや少なかったが、前回（4月）の調査時に比べて増加した。
- 2) トマトにおけるコナジラミ類の発生株率は、12.0%（平年18.9%）であり、平年よりやや少なかったが、前回（4月）の調査時に比べて増加した。

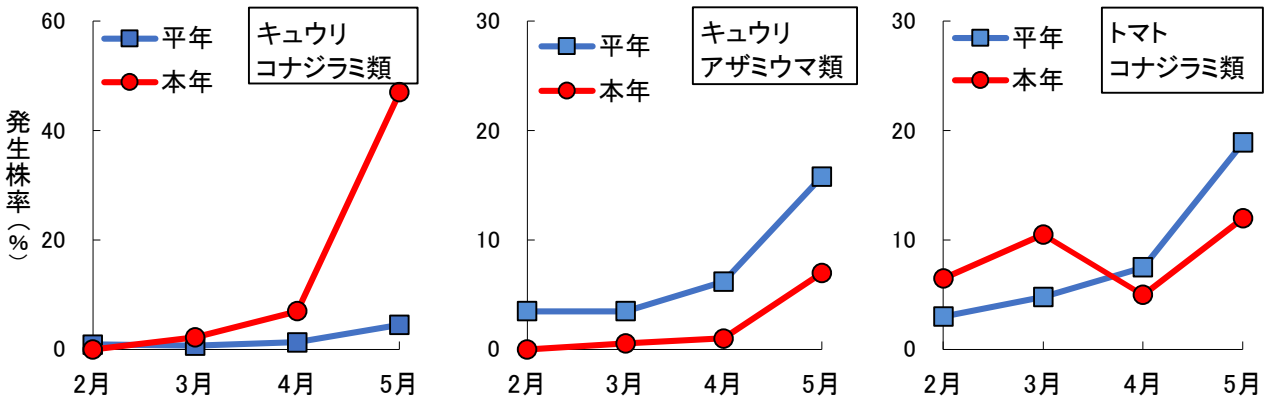


図1 キュウリ、トマトでのコナジラミ類、アザミウマ類の発生推移

【参考データ】

病害虫診断における主な虫媒伝染性ウイルス病の月別診断件数^{注)}

病名 (媒介虫名)	8月	9月	10月	11月	12月
キュウリ黄化えそ病 (ミナキイロアザミウマ)	13	33	32	14	10
キュウリ退緑黄化病 (タバココナジラミ)	6	12	13	2	0
トマト黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	0	13	4	2	1
トマト黄化病 (コナジラミ類)	0	1	1	3	1

・ 虫媒ウイルス病の診断件数は9~10月が多い。
・ その要因として、野外で一時的に生息、増殖した媒介虫が、秋になって施設内へ侵入するためと考えられる。

注) 平成20~令和5年度の合計件数

2. 栽培終了後の防除対策

アザミウマ類やコナジラミ類が施設から飛び出すと、野外で増殖し、次作の施設へ侵入する（図2）。これら害虫の確実な死滅と、ウイルス病罹病株を確実に枯死させるために、十分な期間を確保し、施設の密閉処理（蒸し込み）を必ず行う（図3）。

3. 地域ぐるみでの飛び出し防止の対策

アザミウマ類やコナジラミ類は、キュウリ、トマトだけでなく、ナスなどの他の施設野菜類、花き類など多くの作物に寄生するため、地域全体で一体となって飛び出し防止等の対策を行う。

4. ほ場周辺の雑草の除去

施設内から飛び出したアザミウマ類やコナジラミ類は、近くの雑草などに寄生して増殖し、またいくつかの雑草はウイルス病に感染することが分かっているため、増殖源又は感染源となるほ場周辺の雑草は徹底して除去する。



図2 アザミウマ類、コナジラミ類の主な生息場所（イメージ図）

※施設開口部からアザミウマ類・コナジラミ類が飛び出さないように、以下の工程では、栽培期間中と同様に、開口部全てを0.4mm目合いの防虫ネットで被覆した状態で行う。

1. 施設内の雑草は除去しておく

2. 植物は誘引したまま株元から切る

※切り取った地上部を圃場内に積むと内部の温度が上がりきれず枯れにくい。また、根が繋がって緑が残っている（植物体内に水分が残っている）と虫が生き残ってしまうため、株元から切断し立った状態で確実に枯らす。

又は **キルパー処理して枯らす**

※キルパーの古株枯死の登録がある作物（キュウリ、トマト、ミニトマト等）では、植物は株元から切らない状態でキルパー処理を行う。

3. 施設を密閉し、蒸し込みを行う

※晴天が続いた場合は5日程度、曇雨天が続いた場合は7日以上密閉を行う。
※高温で施設内の設備（灌水設備、暖房機等）が傷まないように対策を行う。

アザミウマ類、
コナジラミ類対策

4. 植物が完全に枯れたのを確認し、残さを持ち出す

※手で茎がパキッと折れる状態を必ず確認する。

他の病害が残さに付いて伝染源となる可能性もあるため、残さは可能な限り持ち出し処分する。

5. 圃場内に植物のない状況を2週間以上保つ

アザミウマ類対策

図3 施設の密閉処理（蒸し込み）の手順

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

